

# 学位論文(要約)

## 学習者の自己内対話を促す 文学的文章の読みの学習指導に関する研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期  
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

武田 裕司

## 1.論文の構成

序章 研究の目的と方法	1
第1節 研究の目的	
第2節 研究の方法	
第1章 文学的文章の読みの学習指導研究における「自己」の取り扱われ方	4
第1節 文学的文章の読みの学習指導研究史における「自己」の取り扱われ方の概観	
第2節 文学的文章の読みの学習指導実践史における「自己」の取り扱われ方の概観	
第3節 文学的文章の読みの学習指導における「自己」の取り扱われ方の成果と課題	
第2章 文学的文章の学習指導における「自立した読者」概念の再検討	30
第1節 文学的文章の読みの指導の目標論の検討	
第2節 現代社会における「自立した読者」概念の再検討	
第3節 「自立した読者」育成のための文学的文章の持つ価値の検討	
第3章 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」	52
第1節 教科教育学および心理学領域における「自己内対話」概念の検討	
第2節 「対話的自己」論に着目することの意義と問題点の検討	
第3節 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」の提案	
第4節 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」の有効性の検証の観点	
第4章 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を用いた教材分析	71
第1節 高等学校における文学的文章の教材分析の観点	
第2節 芥川龍之介『羅生門』の教材分析	
第3節 中島敦『山月記』の教材分析	
第4節 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を用いた教材分析の持つ有効性の検討	
第5章 学習者の自己内対話過程の検討	88
第1節 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を基とした仮説	
第2節 〈他のIポジションに立つ〉ことの持つ意義の検証	
第3節 〈内部ポジションと外部ポジションを往還する〉ことの持つ意義の検証	
第4節 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」の再構成	
第6章 学習者の自己内対話を促進するための学習指導	125
第1節 「ナラティブ・アプローチ」に着目することの意義	
第2節 学習者の「自己内対話」を促進するための学習指導への提言	
終章 研究の総括と展望	144
主要参考引用文献	
資料編	

## 2. 研究の目的と方法

国語科は「ことばの力」を育てることを目的とする教科であるとされ、特に読むことの領域においては「自立した読者」の育成が目指されてきた。この「自立した読者」という概念に関して山元(1994)は、「社会生活の中で、一人で読むための力を子どものものにしていく」ことを読みの教育の意義として重視しており、「自立した読者として学習者を育てていくには、読むことについての意識を学習者の内に育てていく必要がある」ことを述べている。「社会生活の中で、一人で読むための力」とは、この複雑化した現代社会の中で必要な情報を取捨選択しながら、自らの人生について見つめることのできる力のことであろう。つまり、読むという行為を通して自らを振り返ることや社会との相関の中で自らを捉えることを「ことば」によって行うことのできる学習者の育成が目指されているといえる。

このような学習者を育てていく上で、文学的文章のもつ価値は大きい。文学的文章を読むという行為は、その文章世界を「追体験」することであるとされ、現実ではできない体験を体験することや、そのことによって現実の世界をも見据え、考え、葛藤する起点となることがこれまでの先行研究によって報告されている(主に浜本(2001)や府川(1995)、山元(2005a)など)。このように、文学的文章を読むという行為は、読者自身を振り返る、また「私」という存在について追究する契機となりうるものである。しかしそこには難波(2008)に述べられているような問題点が指摘されてきた。

以上のこと(難波の行ったアンケート調査に対する考察のこと：武田補)は、「個人とは独立した一個の自己である」という近代自我論へのアンチテーゼであり、従来の読書行為論や国語教育論の再考を強く促していることを示している。私たちは、「自己内対話」の促進といたって、国語の授業において、「自己内の他者」の声を奪う企みを進めてきたのかもしれないからである。(難波,2008,p160)

つまり、学習者のうちには複数の「自己」が存在しているにもかかわらず、これまでの学習指導では学習活動として自分の意見を発表させることや書かせることによって、学習者のうちに存在するさまざまな「自己」を表出させることなく教師が抑圧してしまう危険性があったことを難波は指摘しているのである。このことから、指導者が学習者の「自己」をどのように捉えているのかという問題とともに、教室において文学的文章を読むことの意味の再検討の必要性があるといえる。

このように考えた際に、「自立した読者」概念の内実を検討する必要性が生じてくる。現在、読みの学習指導の目標が「自立した読者」の育成にあることは言うまでもない。そこでは現代社会において、一人で読む力の育成が目指されているといえよう。しかしながら、この「現代社会において一人で読む力」がどのようなものなのか、その内実については検討の余地があるといえる。「現代社会」がどのような状況であるかを明確にしたうえで、「自立した読者」の指す姿や求められる力について明確にする必要がある。ここに第一の研究課題を設定できる。

この「自立した読者」を育成するにあたって、学習者内の複数の自己を抑圧することなく、学習者自身が「私」という存在について追究するために学習者の「自己内対話」に着目する必要がある。この「自己内対話」を促進する学習指導を行うことが、先の難波が指摘する文学的文章の読みの指導の課題を乗り越えるものであり、この「自己内対話」を社会生活の中で学習者自身が行えることこそが「自立した読者」の重要な要素であると考えられる。

山元(2013)は田近洵一のシンポジウムでの発言を引きながら、文学的文章の指導においては「文学的文

章の〈読み〉の内実」と「教室の〈読み〉の開拓」を追求することの重要性を述べている。つまり、文学的文章を読むことによって読者の内に何が起きているのかという問題と、その文学的文章を教室で読むことの意義がここでは問われているのである。このことと、「自己内対話」の問題から二つの研究課題を設定することができる。

一つ目は、読者の読みの過程を明らかにすることである。文学的文章を読む際の学習者の内実を明らかにすることは、「自己内対話」が学習者の内でどのように行われているかについて検討することである。先行研究において、学習者の「自己内対話」についてその過程を詳細に論じたものは見られない。このように文学的文章を読む際の学習者の「自己内対話」の過程を明らかにすることは、文学的文章の持つ価値を明らかにすることであり、また文学的文章を教室で読むことの意義を明らかにするものでもある。

二つ目は、そのような学習者の内の「自己内対話」を活性化させる学習指導とはどのようなものであると考えられるのかについてである。文学的文章を用いた学習指導によって学習者の「自己内対話」を活性化し、文学的文章を我がこととし、学習者自身が「私」というものを追究する契機とするためにはどのような学習指導をおこなっていくことが出来るのだろうか。先の難波の言にも見られるように、文学的文章の読みの学習においては学習者の「自己内対話」を抑圧する指導となってしまう現状がある。この問題を克服するための学習指導の在り方が問い直されるべきである。

以上を踏まえ、本研究では、以下の三点の研究課題を設定する。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>①「自立した読者」概念の再検討</li><li>②文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程の解明</li><li>③文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する指導法の解明</li></ul> |
|--|

以上で示すように、本研究では文学的文章の学習指導の目標を再検討した上で、その中でも学習者の「自己内対話」に焦点を当て、その学習と指導の問題を実証的に検討するものである。

### 3. 各章の概要

#### 第1章 文学的文章の読みの学習指導研究における「自己」の取り扱われ方

第1章では、文学的文章の読みの学習指導研究と授業実践を、目標と指導方法の観点から検討し、研究課題を設定した。まず、文学的文章の読みの学習指導研究における目標論において学習者の「自己」というものがどのように捉えられてきたのかについて整理検討した。ここでは、自ら主体的に作品と向き合い、作品に対して「自己」と関連づけながら「意味づけ」を行うことのできる事が論じられていた。

次に、授業実践において学習者の「自己」がどのように捉えられてきたか、また学習者が「自己」について追究するものとなるためにどのような学習指導がなされているのかという観点から分析を行った。戦後の文学的文章の学習指導においては、荒木繁「問題意識喚起の文学教育」に端を発し、「学習者の興味・関心をどのように引き出すか」また「学習者の興味・関心を引き出していく「文学作品」の機能」が問題とされてきた(山元,2013)。ここでは学習者の「自己」と文学的文章がどのように関わるのかが問題とされているのである。ここでは教室内の様々な学習者の声を主に書き言葉によって交流させることで、自らの読みを相対化させることを重視した太田正夫や、学習者の問題意識を喚起するために、学習者と文学的文章との関わり方を追究した大河原忠蔵らによる実践がなされてきた。しかし太田の実践に対しては、学習指導の実際が明らかにされていないという批判が向けられ(田近,1987)、大河原に対しては学習者自身が自らの価値観を振り返る契機となり切れていないことに対する批判がなされた(浜本,2001)。

以上を通して、①「自立した読者」概念の再検討、②文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程の解明、③文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する指導法の解明という三点を研究課題として設定した。

#### 第2章 文学的文章の学習指導における「自立した読者」概念の再検討

第2章では、文学的文章の指導の目標として掲げられる「自立した読者」概念について再検討した。

はじめに、主に目標論の観点からこれまでの先行研究における成果と課題について述べた。特に「文学体験」という用語に関しては、研究者や実践家の間で概念に差異がみられる。このことを整理することによって、課題①をより明確に提示した。

次に、「現代社会」と呼ばれるものの内実を明らかにしながら、その中で育成が目指される「自立した読者」概念を再検討した。現代のポストモダン社会に見られるアイデンティティとして複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観が指摘されている(溝上,2008)。ここでは重要な事柄としてアイデンティティ形成の場が「多」領域化していることを挙げており、「自己」をめぐる問題が複雑化していることが示されている。このような社会状況の中で「一人で読む」ことのできる「自立した読者」には、複数化・断片化・流動化した「自己」同士を対話させる「自己内対話」を行うことによって、新たなものを生み出す力が求められると考える。「自立した読者」概念を「自己」という面から再検討することによって、「自立した読者」に求められる力を提示した。

そして、学習者の「自己内対話」を促進するものとしての文学的文章の価値について検討を行った。文学的文章を読むことは「他者の生を生きる」ことであると述べられるように、文学的文章には学習者の「自己内対話」を促進する価値があることを示す。しかし、「自己内対話」によって新たなものが生み出される過程は明らかにされていないことを指摘し、課題②について検討することの必要性をより明確な形で述べた。

### 第3章 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」

第3章では、学習者の「自己内対話」を説明するための理論的枠組みとしてハーマンスらによる「対話的自己」論を取り上げて考察した。自己の世界が分権化され、さまざまな自己を認めつつ、そこにポジショニングして「他者」である他のポジションの「自己」と対話することによって、さまざまな発見や葛藤が生まれ、自己形成がなされると考える点、また自己内対話を「複数のIポジションどうしの声の交換」であるとして理論化しており、「内部」と「外部」ポジションの「往還」を重視しているという点において、ハーマンスらの論はこれまでの自己論を超え、現代における「自己」を考えるにあたって意義のあるものである。

この「対話的自己」論を援用する形で、「文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデル」を構想し、このモデルの有効性を検証するための二つの観点を以下のように設定した。

1点目は、文学的文章の〈対話喚起性〉を明らかにすることである。読者は、自らの持つ既有知識や経験と作品とを関わらせながら読むことによってさまざまな読み行き、自らを振り返ることになることが指摘されている。一方で、文学的文章の学習指導においてはそのような自己内対話がなされていないという指摘も存在する。そのため、モデルを用いて教材分析を行うことによって、文学的文章を読むことによって学習者の内にどのような自己内対話が引き起こされるのか、またそのことによってどのようなものが生み出されるのかについて、その可能性を明らかにする。

2点目は、文学的文章を読む際の読者の「自己内対話」の過程を明らかにすることである。モデルの有効性を検証する際に、学習者の反応を基にしながら分析を行うことで、学習者はどのような過程をたどって自己内対話を行うことになるのかを検証する必要がある。このことは文学的文章の学習指導について検討する際に重要な観点となる。

### 第4章 文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を用いた教材分析

第4章では、先に検討したハーマンスらのモデルを基としながら、「文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデル」を構想し、教材分析の面からモデルの有効性について述べた。「自己内対話」を行うことが「自立した読者」となるための要素であり、そのために「登場人物」や「語り手」といった「他者」の思考構造を体験することがもたらすものは大きい。その点において、学習者の自己内対話を促進させるものとしての文学的文章の価値を述べた。文学的文章を読むという行為において、読者は様々なポジションに立つと考えられる。そのことによってさまざまなポジション間での対話が生み出されるところに文学的文章の価値があることを明らかにした。また、「語り手」に着目することによって、読者が自らを振り返る契機となることを述べた。

教材分析の面からモデルの有効性について検討をすると、文学的文章を読むことによって、読者はどのような立場に立つことができるのかを明示的に示すことができる。また、そのような複数のポジション同士を対話的關係にするためにはどのような学習指導が考えられるのかを検討する手掛かりとなることも述べた。文学的文章を教室で読む際には、学習者の内に自己内対話が喚起される過程に目を向けることが重要である。特に、「語り手」という立ち位置に読者が立つことは重要なことであることがモデルを用いた教材分析によって示すことができた。

一方で、そのような立ち位置に立つことの困難さがモデルを用いて検討することによって問題としてあらわれた。読者が「語り手」に対して意識的になっていない場合にはどうしても読者は「語り手」のポジ

ションに立つことは難しい。学習者に対して指導者が「語り手」に意識的になるように学習活動を設定しても、なかなか「語り手」という概念を理解することが困難であることや、その「語り手」というポジションに立つことによって新たな解釈が生み出されないといった問題が実践報告には課題として述べられていた。「語り手」というポジションを学習者が獲得するためには、学習指導における検討が必要であるといえる。

## 第5章 学習者の自己内対話過程の検討

第5章では、この「語り手」というポジションを学習者がどのように獲得し、それによって何が生み出されるのかについて検討を行った。以下の二つの仮説を設定し、考察を行った。

仮説Ⅰ「異なるⅠポジションに立つことによって、読者は新たな発見や異なった解釈を行うことができる」

仮説Ⅱ「読者の内部ポジションと外部ポジション間に対話を起こすことにより、自らの価値観を対象化して振り返ることができる」

その結果、「語り手」に着目した読みの段階性に関しては、小学校4年生段階においては語り手を認識することができており、その語り手がどのような「物語内容」を語っているのかについては捉えることができていた。小学校6年生段階においては語り手の語る「作品の表現や作品構造」についても目を向けることができており、小学校中学年から高学年にかけてが「物語内容」を捉える段階から「作品の表現や作品構造」に目が向けられるようになる移行期であると言える。また、中学2年生段階になると「語り手の立場性」に対する反応も増加する。特に語り手が語ることを批判的に捉える反応が見られることが特徴的であり、このことは自らの読みを対象化する契機となりうるものであると考える。「語り手」に着目して読む前後の反応の差異に関しては3タイプの特徴が見られた。①『蜘蛛の糸』という作品に対して意味づけて解釈を行うことができているもの ②『蜘蛛の糸』という作品に対して以前とは異なる意味づけて解釈を行うことができているもの ③登場人物に対して新たな視点から評価することができているもの、である。ここで行われる解釈に様々なバリエーションが生み出されること、またそれによって文学的文章と自らとを関連づけて読む契機を読者に与えることが「語り手」に着目して読むことの意義であるといえることを明らかにした。つまり、異なるⅠポジションに立つことによって、読者は新たな発見や異なった解釈を行うことができることが明らかとなった。

次に高等学校における実験授業では、分析の結果、仮説Ⅰに関しては学習者の記述から、新たな発見や異なった解釈を行うことが確認できた。また、仮説Ⅱに関しては、読者の内部ポジションと外部ポジション間に対話を起こすことによって、自らの価値観を振り返ることのできる学習者は、少数であったものの存在し、その前段階とみなすことのできる学習者が複数存在することを明らかにした。そして自らの価値観を対象化して振り返ることにつなげるためには、他者との対話が行われ、自らの読みをメタ的に捉えることのできる力の育成が必要であることを述べた。

ここまで二つの調査の結果から、様々なポジション(語り手や他の登場人物)に学習者を立たせることは、新たな発見や解釈を生み出すこととなることや、学習者の既有知識や体験と文学的文章をかかわらせて読むことによって、学習者が自らを振り返る契機となることを明らかにした。しかしその際には、学習者

が自らの様々なポジションから発する声をメタ的に捉えることのできるポジションに立つことが必要であることを述べた。そのことを踏まえ、うたえで文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデルを再構成した。文学的文章を読むことによって、読者は様々なポジションに立つことができる。その際に、語り手ではない他の登場人物のポジションに立つことは、「私」という今まで読者が立っていたポジションを見つめることである。そこには新たな発見や解釈が生み出される。

また、文学的文章と読者の既有知識や経験をかかわらせて読むことによって、読者は自らの「内部ポジション」と「外部ポジション」を往還する形で自己内対話を行うことになる。このことは、自らの価値観やものの見方を振り返る契機となりうるものである。しかしその際に重要となることは、それらの様々な声をメタ的に捉えることのできるポジションを読者が獲得することである。このことによって読者は自らの内の様々なポジション同士を対話的な関係へと導くことができるといえる。

そして、語り手に着目して読むことは、自らと文学的文章をかかわらせて読むことであり、また「語り手の立場性」に目を向けることは、自らを振り返る契機となるものであることを明らかにした。

## 第6章 学習者の自己内対話を促進するための学習指導

第6章では、「ナラティブ・アプローチ」という手法に着目する意義について述べた。現在、様々な分野においてナラティブという概念が注目されており、ナラティブの定義に関しては必ずしも一定のものがあるわけではないが、「物語、語り」といった語が類義語として用いられている。特に Narrative という英語には「筋/プロットを通じて複数の出来事がつながられ、一つのまとまりをもって区切られる言語形式」という特徴があることが指摘されている。このようにナラティブは「個別の体験を当事者の立場から描くことにおいて有力な視点を提供する」ものであるとされる。

ナラティブ・アプローチは学習者が自らと向き合う学習を可能にする有効な手がかりである。学習者それぞれが自らの物語をその登場人物ごとに紡ぎ、学習者同士で聴きあう。それによって他者との「共有」に目を向けることとなり、新たな読みや考え方を得る契機ともなり得るだろう。そして、そこで合意形成を行って終わるのではなく、もう一度自分一人で本文に立ち返ってみることが必要である。そしてその物語を語ることによって、自らを内省することへとつながっていくことを述べた。

先に述べたように、学習者が自らの内の様々な声をメタ的に捉えるために学習指導を構想する必要がある。様々な声をメタ的に捉えるためには、他者との交流の中で自らの声を相対化し、そのうえで自らの声に対して自覚的に向きあっていく必要がある。「ナラティブ・アプローチ」は、そのようなメタ的なポジションを読者が獲得するための大きな手掛かりとなりうる。よってここでは「ナラティブ・アプローチ」の視点を生かした学習指導について検討することとした。

野矢茂樹は、これまでの文学的文章の読みの指導においてなされてきた「(登場人物の)気持ちはどういうものでしたか」という問いを批判する。なぜならば、このような問いは作品を離れた「空想」に終わってしまうことが多く、これまでもそのような「ナンデモアリの読み」は「読みのアナーキー」として田中実をはじめとする研究者たちによって批判がなされてきたものであるからだ。そのような読みではなく、他の登場人物からはどのように見えたか、という「相貌」を問題にしていくことを重要視している。このことは、これまで検討してきた「文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデル」に当てはめて考えるならば、「異なったIポジションに立つ」ということであり、そのポジションのもつ声(voice)に意識的になることである。ここで野矢の言及において興味深いことは、「作品に現れているものをしっかりと受



け止めること」が重視されているという点である。作品の世界、描かれているものを細部までしっかりと読み込んだうえで、様々なポジションに立ち、そのポジションから発せられる声に意識的になること。そして、そこで生まれた声を他者と交流させることによって、自分がなぜそのような声を生み出したのかということに自覚的になることが求められているといえるだろう。このことは先に述べた「メタ的なポジション」を学習者が獲得するための大きな契機となりうるものである。

文学的文章は多層的な世界である。これまで検討してきたように、文学的文章は読者に様々なポジションに立つ契機を与えるものであり、そのことによって読者は自己内対話を行うことになる。しかしながらこの自己内対話が、読者が自らを振り返ることとなるためには、「メタ的なポジション」に立ち、自らの自己内対話を見つめることが重要となってくる。教室で読むことの価値はここにあらわれると考える。つまり、自らを振り返るとともに、社会と自らとの関係を探るという「自立した読者」となるために、文学的文章を教室という場で他の学習者とともに読むということは、外界である社会と自らをつなぎ媒介してくれるものなのである。それゆえに、教室という場において、自らの物語る声(voice)に意識的になり、そしてお互いの物語る声を「聴きあう」場を作り出すという「ナラティブ・アプローチ」は大変重要なものなのであり、そのことを視野に入れた学習指導の開発を目指した点に、本研究の価値があることを述べた。

## 終章 研究の総括と展望

終章では、本研究の成果を総括し展望を述べた。

成果として、「自立した読者」概念の再検討を行った点が挙げられる。自ら主体的に作品と向き合い、作品に対して「自己」と関連づけながら「意味づけ」を行うことのできることは「自立した読者」となるための大きな条件の一つであることを論じ、その際には文学的文章を読んで自らを振り返る「自己内対話」の重要性を指摘した。現代のポストモダン社会に見られるアイデンティティとして複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観が指摘されている(溝上,2008)。そこでは重要な事柄としてアイデンティティ形成の場が「多」領域化していることを挙げており、「自己」をめぐる問題が複雑化していることが示されている。このような社会状況の中で「一人で読む」ことのできる「自立した読者」には、複数化・断片化・流動化した「自己」同士を対話させる「自己内対話」を絶えず行い、新たなものを生み出す力が求められると考える。「自立した読者」概念を「自己」という面から再検討することによって、「自立した読者」に求められる力を明確に提示した。

次に、文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程を明らかにした点である。ハーマンズらのモデルを基としながら「文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデル」を構想し、教材と実際の学習者という両面から考察した。はじめに、教材分析の面からモデルの有効性について述べた。「自己内対話」を行うことが「自立した読者」となるための要素であり、そのために「登場人物」や「語り手」といった「他者」の思考構造を体験することがもたらすものは大きい。その点において、学習者の自己内対話を促進させるものとしての文学的文章の価値を明らかにした。そして、実際の学習者を対象に異なる I ポジションに立つことによって得られるものを明らかにし、また、読者の内部ポジションと外部ポジション間に対話を起こすことによって、自らの価値観を振り返ることのできる学習者が、少数であったものの存在し、その前段階とみなすことのできる学習者が複数存在することを明らかにした。そして自らの価値観を対象化して振り返ることにつなげるためには、他者との対話が行われ、自らの読みをメタ的に捉えること

のできる力の育成が必要であることを述べた。

最後に、文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する学習指導について論じた点である。ナラティブ・アプローチが、学習者が自らと向き合う学習を可能にする有効な手がかりであることを述べた。学習者それぞれが自らの物語をその登場人物ごとに紡ぎ、学習者同士で聴きあう。それによって他者との「共有」に目を向けることとなり、新たな読みや考え方を得る契機ともなり得る。そして、そこで合意形成を行って終わるのではなく、もう一度自分一人で本文に立ち返ってみることが必要である。そしてその物語を語ることによって、自らを内省することへとつながっていくことを述べた。

本研究の今後の展望としては、このような自己内対話を促進する文学的文章の指導をカリキュラムとしてどのように構想していくのかという点が挙げられる。本研究においては調査対象として全学年を扱うことができていないため、大まかな発達を捉えることはできているものの、学学年段階においてどのような指導が望ましいのかについては詳しく言及できていない。ナラティブ・アプローチの視点を持った学習が、各学年段階においてどのような実践の形が可能であるのかについて検討する必要があるといえよう。「語る」という行為が学習活動の中でどのように具現化することができるのかについても検討する必要がある。そこには「語り手—聴き手」の関係を教室の中でどのように作り上げていくのかといった、教室の在り方自体を問うていくことで、学習者の自己内対話を促す学習指導についてより長期的な視点から検討することが残された課題である。

#### 4.主要引用参考文献

- 田近洵一(1987)「十人十色の文学教育論の特質とその可能性」太田正夫著『〈新版〉想像力と文学教育—十人十色を生かす文学教育』創樹社
- 丹藤博文(2010)「第六章 「羅生門」(芥川龍之介)の授業実践史」『文学の授業づくりハンドブック』pp118-137 溪水社
- 難波博孝(2008)『母語教育という思想 国語科解体/再構築に向けて』世界思想社
- 能智正博(2013)「4 節 ナラティブ・テキストの分析」やまだようこ他『質的心理学ハンドブック』新曜社
- 野矢茂樹(2016)「ポリフォニー的世界を読み解く」『日本文学 Vol.65』
- 野矢茂樹(2016)『心という難問』講談社
- 浜本純逸(2001)『文学教育の歩みと理論』東洋館出版社
- 府川源一郎(1995)『文学すること教育すること』東洋館出版社
- 溝上慎一(2008)『自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社
- 森岡正芳(2013)「4 章 1 節 ナラティブとは」やまだようこ他『質的心理学ハンドブック』新曜社
- 山元隆春(1994)「読みの「方略」に関する基礎論の研究」『広島大学学校教育学部紀要 第 I 部』第 16 巻 pp29-40
- 山元隆春(2005a)『文学教育基礎論の構築』溪水社
- 山元隆春(2005b)「二 小説の学習指導」『朝倉国語教育講座 II 読むことの教育』朝倉書店
- 山元隆春(2007)「「対話的自己」を育む条件—ポール・フライシュマン『種をまく人』を手がかりとして—」『月刊国語教育』2007 年 1 月号 pp16-19
- 山元隆春(2013)「2 文学的文章の領域における実践研究」『国語科教育学研究の成果と展望 II』明治図書

pp193-200

山元隆春(2014)『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』

H.Hermans、H.J.M.&Hermans-Jansen、E.(2003). Dialogical processes and development of the self.In  
J.Valsiner&K.Connolly(Eds.)Handbook of developmental psychology.London:Sage:pp534-559

H.Hermans&H.Kempen 著 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳(2006)『The Dialogical Self 対話的自己  
デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』